



写真：6月27日ウクライナ憲法記念日の集会（JR元町駅東口前）

Contents

- ▶ 巻頭言
2024年度CODE基本方針・・・・・・・・・・ 1
- ▶ 特集
KOBEでのウクライナ支援の取り組み・・ 2
- ▶ 2023年度事業報告＆2024年度事業計画・・ 4
- ▶ プロジェクトレポート
能登の文化、人々の営み・・・・・・・・・・ 6
トルコ・シリア地震から一年半を経て・・ 8
- ▶ CODE未来基金NEWS
インターン生の紹介・・・・・・・・・・ 10
- ▶ イベントレポート
NGOことはじめ・・・・・・・・・・ 11
能登半島地震報告会・・・・・・・・・・ 12
- ▶ スタッフ活動記録・・・・・・・・・・ 13
- ▶ 会員・寄付者ご芳名・・・・・・・・・・ 14
- ▶ 活動へのご協力のお願い・・・・・・・・・・ 16

2024年度CODE基本方針

「被災地の豊さを復興に～阪神から30年を目前に～」

2024年は、元日から能登半島をM7.4の大地震と津波が襲い、4m以上の海岸隆起という想像を絶する甚大な被害をもたらした。私たちは、2007年の地震後から1000年前から継承されてきた能登の「お熊甲祭り」に毎年参加してきたご縁もあり、地震後すぐに被災地NGO協働センター、兵庫県防災士会と共に支援を開始した。翌日、食料や燃料などの救援物資を積んで能登へ向かった。そこには、ライフラインの途絶えた暗闇の被災地で唯一明かりの灯った避難所で被災住民自身が助け合う姿があった。集落内の多様な職能を持つ住民たちが、電気、水道、道路の復旧や炊き出しなど、誰に言われるでもなく、それぞれに判断して自分のできる事を行っていた。中でも注目に値するのは、集落内の道路を補修し、崩落した国道を迂回する道を作ったのは、自衛隊・消防ではなくこの集落の人たちだという事だ。この市民自治がもたらす共助が奥能登への緊急車両や被災者の車両の往来を可能にした。このような迅速な動きができた事を「祭り」があるからだと言区长は言う。能登には、豊かな自然風土の中で培われてきた住民どうしの支え合いの伝統が今も息づいている。

海外に目を向けると、ウクライナとロシア、パレスチナとイスラエルの戦争が今も多く命を奪っている。そして、1年を経たトルコ・シリア地震の被災地ハタイ県では、政治的・宗教的な理由で政府から支援はほとんどなく、未だ厳しい状況が続いている。ハタイのNGO「Dayanışma Gönülleri（連帯ボランティア）」には、リーダーは存在せず、約50人の被災住民が主体となって仮設住宅で共同生活をしながら、物資配布や水浄化システムによる水質改善などの支援活動を行っている。

街の大半が被害を受け、多くの人が故郷を去り「消えたハタイ」と呼ばれるようになったが、彼らは「自分たちの力を証明したい」と住民主体で伝統文化や歴史を取り戻すために復興の一步を踏み出している。メンバーのある夫婦は、不自由な仮設住宅であっても、故郷の農村で作った農作物を使って自給自足に近い暮らしを実践している。都市部の被災地においても、土地とつながった暮らしがその人々を支えている。

日本の農漁村をくまなく歩いた民俗学者の宮本常一は、その著書で「古い事を大事にしていくながら伝統だと思っている人が多いが、伝統とは自分の生活をどのように守り、それを発展させていくか、いったか、その人間的なエネルギーをさしているものである」と語っている。

トルコ、そして能登にも豊かな自然風土とつながった人たちがいて、一人ひとりが豊かな技術や知恵、人間的エネルギーを持っている。その豊さは数字やコストでは計算できるはずがない。豊かな自然風土と一人ひとりを尊重した復興をどのように実現していくのか。

まもなく阪神・淡路大震災から30年の節目を迎える。NGOの代表であった故草地賢一の遺した「官に言われなくてもする、言われてもしない」という精神は、市民ボランティア活動の中で発展、深化してきたのか。発災5か月で孤独死という形でかけがえのない一人の命を喪ったという能登の状況から、私たちは何を学び直し、南海トラフなど次の災害にどう備えていかなければならないのか。阪神30年を目前に今一度、私たち一人ひとりが自分自身に、そして社会に問いかけ続ける事を決意する一年としたい。

（CODE事務局長 吉椿雅道）

KOBEでのウクライナ支援の取り組み

2022年2月24日にロシアからウクライナへ軍事進攻が始まってから2年以上が経過しました。ウクライナの人口の約4分の1以上が国内外に逃れ、日本にも2000名以上、兵庫県には102名（2024年6月30日時点）が避難を続けられています。CODEもMOTTAINAIやさい便や子守ボランティアを通じて、ウクライナ支援を行ってきました。戦争の長期化の中で、日本に避難してこられた方はどのような現状・課題があり、私たちは地域で何ができるのでしょうか。今回は（公財）兵庫県国際交流協会外国人県民インフォメーションセンター センター長河知秀晃さんと通訳や生活支援を通じてウクライナ避難民を支えて来られた神戸市在住のオクサーナさんにインタビューを行いました。（島村）



（公財）兵庫県国際交流協会外国人県民
インフォメーションセンター
センター長 河知秀晃さん

河知さんはこれまで兵庫県国際交流協会にてウクライナ避難民等相談窓口をされてきて、どのような変化や課題を感じますか？

今ウクライナの人知ってほしいと思うのは、去年の12月頃からできた補完的保護対象者（＊1）っていう制度。でもみなさんまだあまりされていません。認定されると生活保護を受けることができ、生活・働くための日本語研修を受けることができます。申請の説明会などはオンラインでして30名ほどいました。でもまだ迷って受けない申請していないという方はたくさんいらっしゃるようです。定住者となったから国へ帰れないということは全然ないですね。

実際に避難されているウクライナの方々の地域での生活はどうか？

各市ともこれから問題となっているのは就労と時間が経ったことによる心のケアです。ウクライナ避難民で来られる方は女性・小さい子を連れた母親、高齢の方が多いです。特に高齢の方は今から日本語を覚える自信がないし、そういうことをしようとは思いません。

地域での孤立もあるのでしょうか。

そうですね。一つ問題なのは住んでいるところが大体県住とか市住ですね。団地の自治会の方以外のご近所さんとの付き合いがないかもしれません。だから震災の後の孤独死の話とかも同じでその部屋に閉じこもっちゃうと周りとの交流がしにくくなります。だから普段から周りからの声かけしているのが必要になってくる。そういう意味でCODEさんがやっている野菜便（＊2）は非常にありがたいです。孤立する人がいないように色々な団体さんの事業であるとかそういうことでもって声かけていくっていうのは大事だなと思います。「言われなくてもやる」のがNGOの基本姿勢だからそのためにお金を出すとかが、情報を流したりとか我々行政はします。

地域で必要な取り組みは何でしょうか？

補完的保護対象者ができて、低実質のプログラムなどを国がやりだしたということはウクライナ避難民の人たちへの扱いを特別扱いから一般の外国の人と同じ扱いにしようという方針に代わってきています。その扱いの中でこれからどうしても救えない人、例えば働かない、働けない、人たちがどうやって収入を得ていくか。支援金が切れたときの救済手段が生活保護になるけど、日本に親族がいるから来ていると逆に受けられないかもしれません。あとは孤立しがちな人。高齢者のケアとしてちゃんと生きがいをもってられるようにできるのはむずかしいかもしれません。一番いいのは早く戦争が終わってウクライナに帰れるようになることと思うんですけど、今の感じだと当分無理そうですね。

比較的若い方は日本で定住するという選択肢が強くなる可能性は高いかもしれませんが、特に高齢の方々は帰りたいと思います。

最後に一言

本当はこの定住支援プログラムを今まで難民申請をしてダメだったひと、苦勞している人、最終的に非正規滞在者になっている人とかそういう人たちがこういうもので救えればいいなと思いますが、まだそうなるかは分かりません。これからの運用次第です。日本に来た外国人はいろいろな地域で暮らすわけですね。じゃあその地域で暮らしている限り地域の住民と一緒に暮らす。そういう人たちが同じような地域で同じように暮らしやすく、生活しやすい環境でいられるようお手伝いしようっていうのが地域のあるべき姿ですね。



6月27日ウクライナ憲法記念日の集会

＊1補完的保護制度

難民条約上の難民には該当しないが、国際保護を必要とする者を保護し、かつ、そのような者に国内法上の地位を付与する法的枠組み。国際基準と比較すると日本は対象範囲が狭いとも言われています。日本では「定住者」の在留資格、永住許可の要件の緩和、そして政府の実施する定住支援プログラムが受けられます。

＊2 CODEのウクライナ避難民支援はP4事業報告・事業計画をご覧ください。

（インタビュー：山村、山本、島村）



ロマノヴィッチ・オクサーナさん
（写真右から2番目）

オクサーナさんはどのようにウクライナの支援を始められましたか？

最初は戦争が始まって、なんとかしたい気持ちがあった。日本はウクライナ人ウエルカムだったので、なんとかサポートしたいって気持ちで、Instagramで見つけた泉佐野市の団体に仕事が始まりました。難民カードを作ったり、日常会話、ゴミを出す方法、買い物に行ったりなどの日常生活をサポートしていました。美容院や病院、医療通訳はオンラインで別の方でしたが市役所とかいろんな種類ありました。で、その後PHD協会や日本語教室を手伝うようになりました。

避難してこられる方の支援を続ける中で、最近はどう感じられますか？

すごいみんなの気持ちが変わっていますね。例えばお姉さんは最初来てすごい明るい気もちで何とか仕事も見つけないし、日本も景色とかすごい興味あって散歩していました。だけど娘さんが中々慣れないから彼女も元氣なくなって。あとは最初からみんなウクライナに帰りたい気持ちあって、今も帰りたい気持ちありますね。戦争が終わるように祈りますけどやっぱり終わらなさそうですね。義妹も日本に2年いる。弟は（ウクライナで）出られないです。男性は国から出るの禁止だから、彼女はすごい今大変で旦那さんとすごい離れてて、仕事もしたくないしウクライナにすごい帰りたいし。今は「どうする？」「帰る？」「どこへ行く？」仕事も見つかるか見つけないかどうしようってなりますね。日本に慣れた人はいるかなと思います。あと例えばマリウポリから避難してる人は帰る場所もないし、やっぱり日本に住むんですね。でも日本に合わない人はいるんです。その人は大変だと思う。

神戸でウクライナのコミュニティ施設を立ち上げられると伺いました。

ウクライナの人で仕事探しに行く人がたくさんいます。例えば日本語わからない英語わからない、その人たちが仕事するために何とかしたいと思って。みんな料理が得意だったりするので、場所があれば仕事がない人もなんとかできるかなと思いました。それで最初はそういうコミュニティを作りたいって。ウクライナの友達みんなに声をかけて、日本人の協力者に場所ももらってコミュニティスペースができました。今は古くてまだリフォームと掃除が必要ですが。そこではウクライナの伝統的な文化を伝えるワークショップやウクライナ料理して販売したり、日本語・ウクライナ語学んだり、お茶会したり。仕事ができない人は何とか仕事できるように頑張ってもらいたい。もう2年ボランティアとしてずっとなにかしていたり、給料をウクライナに送っていたりで、私の気持ちは「日本にいるウクライナの人が仕事をして、給料を得てほしい」です。日本人とウクライナ人はお茶を飲みながら、日本語とウクライナ語勉強、互いに勉強したら友達になれるかな。

最後に、伝えたいことがあれば教えてください。

やっぱり戦争が終わってほしいですね。ウクライナだけではなく、世界中が平和になってほしい。だからそれはできる人がお願いします。みんな生活はそれぞれ違う。みんな仲良くしてほしいと思います。



インタビューには学生も参加しました

（インタビューア：那須、近藤、島村）

インタビューを聞いた学生からの感想

最近、日本では、ロシア-ウクライナ戦争への関心が低下していると私は感じています。しかし、ロシアのウクライナ侵攻により、多くの犠牲者が今もお出続けていることを、日本は先の戦争の経験もあるので、決して対岸の火事だと思ってはならないと思います。沖縄では、先の地上戦によって、今でも苦しんでいる方々がいらっしゃいます。ウクライナもそうなるのだらうと思うと胸が痛いです。戦争によって、自分の住んでいる土地やかけがえのない日常生活が奪われてしまうことがどんなに辛いかということ想像し続けることが大事だと思います。子守ボランティアに今後も関わり続け、think globallyにとどまらず、act locallyを意識し、日本で、ウクライナ避難民の方々に対して何ができるのかを考え続けたいです。（大阪大学 那須公香）

日本に避難してきている人たちは、言語の壁や生活の違いなど、さまざまな負担を抱えながら避難生活を送っています。そのような避難民の方々にとって、オクサーナさんがつくっているコミュニティは力強い支えになるのではないかなと思いました。またオクサーナさんが自身の活動の中で行っているウクライナ文化ワークショップについて楽しそうに話してくださり、私もウクライナ文化の魅力に引き込まれました。伝統的な言語や文化を大切にしている人がいる限り、それらが失われることはあってはならないと思います。日本にいる避難民の方々が大切にしているものを「私たちが知ること」で守っていきたいです。そして、避難民の方々が少しでも日本での生活を楽しめるよう、私たちができることをサポートしていきたいです。（関西学院大学 近藤明日香）

2023年度事業報告 & 2024年度事業計画

海外災害地への救援活動事業

【中国・四川大地震】

「2023年度報告と2024年度計画」

CODEは、2008年の四川大地震後、北川県光明村で多国籍のボランティアと共にガレキの片付けや祭りの開催、耐震の伝統木造家屋の再建、高齢者の集うコミュニティセンターの建設などを行ってきました。2020年の新型コロナウイルス感染症で中国への渡航が不可能になり外国人の入国や活動が制限され2023年度もその影響で現地に行く事ができませんでした。2024年度こそは現地に渡航し、光明村の現状把握や現地のNGOとの防災・減災の研修、日本の若者が四川の被災地で学ぶ「日中NGOボランティア研修交流事業」を再開したいと思います。

【ウクライナ避難民支援】

「2023年度報告と2024年度計画」

2022年2月のロシア軍によるウクライナへの軍事侵攻から2年半、未だ戦争は終結に向かうどころか情勢は非常に厳しいものになっています。CODEは、2022年5月から神戸市内に避難しているウクライナ人42名（17世帯）に新鮮な有機野菜を提供し、日本での生活の困りごとに対応する「MOTTAINAIやさい便」事業を行ってきました。2023年度も野菜を提供したり、母子家庭の母親のストレス軽減のために大学生を中心に4世帯のウクライナ人家庭に「子守りボランティア」を派遣してきました。2024年度は、1月の能登半島地震支援のために休止していた野菜便を再開し、子守りボランティアも引き続き行っていく予定です。

【トルコ・シリア地震】

「2023年度報告と2024年度計画」

2023年2月に発生したトルコ・シリア地震後、CODEは現地に5回スタッフを派遣し、被災者への物資配布や現地NGOと共に被災地の3か所の仮設住宅内に「子どもと家族のケアセンター」を建設しました。センターでは、保育士や心理士がトラウマを抱えた未就学児の保育や心理ケアなどを行っています。2024年度は、被害の最も甚大であったハタイ県で、現地のNGOと共に耐震普及や生活再建などのプロジェクトを実施します。

【アフガニスタン】

「2023年度報告と2024年度計画」

2021年のイスラム主義勢力タリバンの政変により沢山の難民が国外に逃れました。CODEのカウンターパートの国外退避も実現にいたりませんでした。2023年度も神戸市内に避難してきたSさんとその家族への見守り活動として「MOTTAINAIやさい便」で有機野菜を届けてきました。2024年度は、引き続きSさん家族の見守りと、アフガニスタンのカウンターパートのFさんを通じてぶどうプロジェクトを再開し、再び有機レーズンを輸入販売することで現地の農家を支える活動を進めていければと思います。



右：2月24日阪急三宮駅前での平和のつどい

左：子守りボランティア



NGO「Dayanışma Gönülleri」のメンバーと

人材育成事業

【CODE未来基金】

2023年度は、神戸大学社会防災学科を卒業した山村太一をスタッフに迎え、島村優希さん（大阪大学4年生）や植田隆誠さん（関西学院大学4年生）も学生スタッフとしてトルコ・シリア人、ウクライナ避難民支援、そして能登半島地震支援、CODEレター制作など事務局業務にも尽力していただきました。2024年度は、山村をリーダーとした能登半島地震支援の「やさしや足湯隊」の活動を継続します。また、新たなインターンとして神戸学院大学2年生に玉地紘樹さん、岩尾正貴さんの二人に、「NGOことはじめ」の企画・運営や能登半島地震支援の足湯隊の引率などを通じてCODE未来基金に関わる若者たちを応援していきます。

国内外のネットワーク構築事業

2023年度は、コープこうべとは、「トルコ・日本ユースボランティア交流」で5名の若者たちのトルコの被災地での活動への資金拠出、関西NGO協議会とは理事会やKansai-SDGs市民アジェンダや関西NGO-JICA協議会への参画、近畿ろうきんとは例年通りCODE寺子屋セミナー2023（以下参照）を共催しました。

その他、トルコ・シリア地震関係の報告会や講演などに多数講師派遣を行いました。大学などでの講義は、例年通り神戸学院大学、親和大学、関西国際大学、龍谷大学、舞子高校などに加え、北陸学院大学、関西学院大学、防災教育学会などでの講義にも講師派遣を行いました。海外のネットワークでは、災害支援を通じてつながってきた中国、フィリピン、ネパール、インドネシア、トルコと2024年度も連携を図っていきます。

市民による災害救援に関する調査・研究事業

【CODE寺子屋セミナー2023】

近年、災害や紛争が多発する世界の状況を踏まえ、フォトジャーナリストの安田菜津紀さんをゲストに寺子屋セミナーを近畿ろうきん、関西NGO協議会と共に開催しました。

「災害・紛争、、混んとした時代に私たちはどんな未来を選ぶのか-阪神淡路大震災30年を目前に-」をテーマにした講演、ディスカッションに65名の方々にご参加いただきました。2024年度は、阪神淡路大震災から30年を迎えるにあたり、引き続き災害や紛争など世界の課題をテーマに市民主体で議論する場を提供していきます。

国内災害地への救助活動事業

【能登半島地震】

2024年元日の地震発生後すぐに姉妹団体の被災地NGO協働センター、兵庫県防災士会と連携して支援を開始しました。翌2日にスタッフ2名で食料・燃料などの救援物資を積んで七尾市中島町小牧に向かいました。その後、小牧集会所を拠点に被災地NGO協働センターのスタッフが常駐し、ボランティアの受け入れや物資配布、家屋片付け、足湯、炊き出し、遊び場などの支援を展開してきました。また、大学生などの若者を中心に「やさしや足湯隊」を結成し、七尾だけでなく珠洲や輪島、穴水などの避難所や仮設住宅で足湯を提供してきました。能登半島の被災地の復興が非常に遅れている事もあり、2024年度も引き続き小牧での活動や足湯ボランティアを通じて一人ひとりの声に耳を傾け、復興の一助を担っていきます。



＊お熊甲祭り：久麻加夫都阿良加志比古神社（熊甲神社）の大祭。19の末社から猿田彦の先導で、高さ20メートルばかりの深紅の大杵旗を従えた神輿が本社に参入する。写真は妙技「島田くずし」の様子。

地震直後の様子

吉椿：僕達、2009年から毎年、お祭りに参加させてもらってきたご縁もあって、地震が起きてすぐに小牧の皆さんに連絡を取りました。そのときの状況をお話してもらえますか。

加賀：1月1日は、小牧壮年団の新年会で小牧会館で飲食をしていました。夕方に自宅に戻った矢先、16時6分くらいに一回目の緊急地震速報が流れました。自分は県の職員で、上司に電話をしていました。そうしたら2回目の速報が流れて、揺れがすごく長くて強くて、「あ、これはやべえやつや」と一瞬想って、しゃべっていたこの携帯も飛び、私自身もうびっくり返りました。小牧会館がもうぺっちゃんこになるんじゃないか、と思って、「ぐねぐね、ぐねぐね、周ってました」。その後、地震もなんとかおさまって、みんな自分の家の人間の安否確認をしました。丁度そのタイミングで津波警報が出たんです。本震の4時10分の地震はずっと揺れて、「もう頼むから止まってください」思いました。それからみんな散り散りになりました。別れ際に津波警報出たので、「みんな高台いく！」と言いました。そこで一度皆、バラバラになりました。

吉椿：直後に淳さんが「とにかくみんなで生き残ります。」と言ったのを今も覚えています。小牧会館あたりに集まるうって言ったのは、誰だったんですか？



6月21日～23日に派遣された第11次やさしや足湯隊のメンバーも一緒にお話をききました！

能登半島地震支援

能登の文化、人びとの営み

七尾市中島町小牧は2007年の能登地震をきっかけに、CODEおよび被災地NGO協働センター（CODE姉妹団体）が2007年の地震を機にお熊甲祭りを通じた関係性を築いてきた地域です。令和6年（2024年）能登半島地震発生直後からも連絡をすぐに取り合い、これまでも地域の方々と一緒に復旧・復興へと取り組んでいます。今回は小牧壮年団OBの加賀淳一さんに、小牧の地域やお祭りについてのインタビューを行いました。（聞き手：吉椿）

加賀：小牧会館は小牧集落における避難所とし位置づけられている一つでした。全員が把握していたわけでないですが、北豊弥さんが区長時代に防災マップとか地域の支え合いマップっていうのを作ったんです。もちろん危ないところがどことかもそうですが、その前にどういった方が小牧に住まわれているかっていうのをみんなで明示化しようということで書いたんです。十何年くらい前かにしたんですかね。で、それを皆なんとなく覚えてて、そういう人たちが今この辺にいるはずだからってということで、呼び掛けて、それぞれの区域の高台をめざしました。北豊弥さんが区長になって、地域 みんなが笑って暮らし続けるというか、安心して暮らし続ける地域をまざそうっていうのがあったので。

地域の自治

吉椿：僕たちは1月2日の夜に、小牧に着いてびっくりしたのが、小牧の避難所のコミュニティセンターだけ、電気がついて周り全部停電でした。何故こだけ電気あるの？って。

加賀：私も1月1日の夜はそこに泊まっていて、その夜はものすごく静かで、みんな凍え死ぬと思うようなぐらいでした。天気が良くて、星空で、救急車の音も、消防車の音も聞こえない。ということは、絶対、道路が寸断。みんなとてあえず割れたガラスの掃除とか、テントを建てるとか。電気は発電機に差し込んで投光器つけて。とにかく何でも使おうと、生き抜かなくちゃダメやっていうのが頭にあったんです。生きていてこそ、怒られることもできますし。次のステップにも行けるので。

吉椿：なるほど。2日の夜にびっくりしたのは小牧の方々道路修復など自分達で何でもされていて。なぜあんな風に出るんでしょうか？

加賀：やっぱりみんな適材適所をわかっているんでしょうね。ワークショップとかも結構やって、中でもまず人の意見は否定しないからっていうルールから始めているんで、まず一旦はみんなで考えるようになっていっているんでしょうね。例えば国道249号ってあるんですけど。それが小牧地内で寸断されて。今直しとかないともっと渋滞が起きてひどい状況になるよというのが容易に想像ができたわけです。

我々も自分の家を片付けに様子見に行きたいけど、余震があって怖くて行けないんですよ、正直言って。それなら今のうちにとにかくみんなが奥能登の方に向かえるようにしとかなないとダメだろうということで動き始めました。当然のことながら土木事務所の許可とか市役所の許可を取ってないからこんな勝手したらダメやという方もいました。正しいことなんです。でも、それは先ほども言った通り今やとっかないととにかく何もできなくなるよっていうことです。後の責任は自分たちが取っているような感じで。

吉椿：それは本当に大事なことで、小牧の方がそれをやらなかったら、緊急車や支援者が全部奥能登に行けなかったんですよ。

お熊甲祭り

吉椿：区長の赤坂達也さんにあんなことがなぜできるんですかって言ったら「祭りだ」って言ったんですよ。

加賀：その通りだと思いますね。祭りでもその場その場で対応して解決しなくちゃいけないことっていうのはやっぱりありまして、みんなの自分の役割っていうのはその場でもあるんですよね。だから祭りっていうのはすごくみんなの絆というか深めるためにすごく必要なものだなあとと思っています。

吉椿：お熊甲祭りと祭りの時の壮年団、女性などの地域の方々の役割も改めて聞いてもいいですか？

加賀：はい。まず私の所属する壮年団の目的は、祭りをするための団体なんです。祭りのときは当番っていうのがありまして、当番班はお神輿を迎えてご馳走を振る舞うなどがあります。壮年団を卒業した人たちや女性、老若男女関わってそれをやることになっています。今は当たり前のように子どもたちや女の子、大学生の女性などお祭りに出てもらうようにしたんですけど。その前までは女人禁制みたいな感じでした。だから我々が実はお熊甲祭りにおいては女性を数十年ぶりに参加させた最初の集落なんですよ。そもそも女性をや外部の大学生を誘致して祭りをするっていうことに対して、最初は否定的な人が多かったんです。でも神戸の皆さんと一緒に祭りをするようになってから、地元もそうですし、他の集落の皆さんの見方も変わりました。

吉椿：祭りによそ者を入れることへ伝統的な価値観を持っている人が多いこと、壮年団が高齢者の方々に納得してもらうために普段から買い物サービスとか色んなお手伝いをしていたんですよ？北さんに聞きました。

加賀：そうです。それが支え合いマップとかのきっかけになった形ですね。要は、小牧でもお互い知らんもん同士が混在していたということです。それがやっぱりみんな少しでもその人のことを理解することで、何をこんなに嫌がっているんだろうかとか解決の糸口が見つかるんじゃないかと思います。



神戸からの参加メンバーと小牧の方々

えー（結）する

吉椿：お祭りで、他の外の集落の神輿とかを手伝いに行くときに「えーすっぞ」って皆言うんですよ。今回地震の時に二日目に入った時にやっぱそれを言って。「えー」っていうのはまさに「結」。例えば稲作共同社会で田植えとか収穫をみんなで助け合うのを結って言いますが。

加賀：「えー」は助け合いなんですね。お互い様の。でも現在は機械化が進むことでその農村地帯に「えー」の文化は衰退していくんですが、たまたまこの地域は、集落同士の若い衆同士の祭りの「えー」が残っています。だから、小さい集落でも杵旗とか神輿は出せたんですよね。少子高齢化とかで集落が小さくなっているわけではなくて、元々小さい集落ってのもあったんですよ。小牧はその「えー」っていうものは祭りに関してはなかったんです。

吉椿：そうなんですね。昔は、小牧は人口が多かったから集落同士で「えー」する必要がなかったんですね

加賀：それでもやっぱり人間の数は減っていくので。これは続かないなって考えたわけです。そこで、我々が活路を見出すのは地域外の方々に来てもらって一緒に楽しんでもらう。やっぱりこの地域を好きになってもらって、将来移住とか定住してくれる人が出てくればいいなとか。毎年何かの機会にお越しいただいて、お話ができればいいなとかそういうのも考えながらやりました。

あとはもっと大きい視野で見たら日本って全員が結びやないんかと思うんです。要は、農村地域っていうか田舎は米とか作って都市部に出して、都市部はいろいろ工業製品とか生産して車とか使ったりしますし、これは大きい括り言えばこれが結じゃないのかと。こうやって行き来していること自身がまず結なんじゃないかなって思うようになったんです。大学生たちは自分たちの地域の大事なものを守っていただく代わりに、私たちの地域が持っている資源を提供しますというような。それが、釣りをしていただくこととか美味しいものを食べてもらうとか、お返しできるものじゃないのかなと思っています。

吉椿：今回の能登のような半島の震災は、能登の事だけでなく、明日の他の地域の姿ですよ。自分事の考えないで。

加賀：今回の1月1日の地震でいの一番に駆けつけていた神戸の皆さんとの絆っていうのは本当にあったと思いました。お互いがお互いに結をどこかでしているというか結果的にどこかで元々つながっている人たちがつながっているというか、なんか表現がしにくいんですが、社会は結でつながっているんではと思います。（笑）

能登の里山・里海

吉椿：2011年能登の里山里海が世界農業遺産に指定された時に、淳さんがこの遺産にお熊甲祭りも入っていて、それを神戸の人たちが支えているんだと言ってくれたんですね。世界遺産との違いは、「文化や人の営み」なんです。

加賀：そうです。能登の里山里海が農業遺産に認定されたのは「人の営み」があったからこそ千枚田やお祭りが残っているし、祭りも含んだ構成資産の一つなんですよ。財務省が最近言って残念だったのがコンパクトシティとかコストを考えなくちゃいけないとか。はっきり言って暮らしとか文化とかが失われていって何魅力を感じない国になってしまうんじゃないかなって思うんですよ。やっぱり故郷を今もう不本意にも離れている人たちがいます。そういう人たちが戻れるようにするというのが本当の復旧であり復興でありってことにつながっていくのかなと思って。やっぱり私たちはここに生かされている人間としてこれを次の世代につなげていきたいなあと思いつながら、日々今暮らしをしています。そしてその本当に皆様がいろいろ助けていただいたりお越しいただけるだけでも本当ありがたいです。

トルコ・シリア地震支援

トルコ・シリア地震から一年半を経て
Şih Mehmet（メフメット）さんの寄稿



2023年2月6日にトルコ南東部を震源とするM7.8の巨大地震が発生し、隣国シリアを含めて、死者5万9259人、負傷者12万人以上、倒壊家屋約35万5000棟と甚大な被害を出しました。

その大災害から1年と半年を経た被災地で未だなお献身的な活動を続けられている NGO Active Participants AssociationのメンバーのŞih Mehmet（メハメット）さんに今のトルコ・シリア地震の現状や今後の課題、日本に伝えたいことなどを寄稿していただきました。メフメットさんは、去年のトルコ・シリア地震第一次派遣から第三次派遣と若者によるトルコ×日本ボランティア交流会でも大変お世話になった方です。お忙しい中、ご寄稿いただきありがとうございます。ページの構成上、全てを掲載することはできませんでしたので、一部抜粋しております。ご了承ください。



私は1991年から社会活動において積極的な市民です。1994年にガズィアンテプに移住し、都市の恵まれない地域でボランティア教育活動や社会的・経済的な支援を始めました。1999年1月には、生涯学習分野で積極的に活動している家庭教育者、退職者、弁護士、建築家、エンジニア、公務員、大学生などが中心となり、数人のボランティアグループとして活動を開始しました。2008年2月7日には、16人の設立者と23人のボランティアと共に「Aktif Katılımcılar Derneği（積極的参加者協会）」を正式に設立しました。主に恵まれない地域に住んでいる家族、若者、成人、移民や難民の問題についての認識及び問題の解決のための機会を創出することを目的としています。若者、成人、難民の地方自治体の意思決定プロセスへの参加を促進し、社会的発展や職業スキルの向上を図る活動を行い、社会的問題に対する意識を高めるよう有志に支援しています。

もう一つの目的は、我々の地方の恵まれない地域の問題を抱える若者や成人の生活スキルを教育を通じて支援し、社会への積極的な参加を促進することです。社会経済的に遅れを取っている地域の若者や成人の個人および社会的発展を支援することを目指しています。これまで多くの地方および全国の機関と共同でプロジェクトに参加してきました。

地震が発生した瞬間から、私たちもNGOなどに呼びかけ、「社会企業連合」WhatsAppグループを作成しました。地震前に市民社会で経験豊富なボランティアの友人たちの助けを借りて、地震連帯において最も迅速に行動するグループとなりました。

「社会企業連合」は、NGO間の連帯を確立し、この分野で初めての取り組みでした。公共サービスとNGOの間で橋渡しの役割を果たし、地震発生後数時間で急速に拡大し、ガズィアンテプから被災地への最も活発な支援を提供する市民イニシアチブの一つとなりました。多くのグループはしばらく時間が経ってから地震連帯から離れ、元の目的に戻りましたが、「社会企業連合」は依然として多くの活動を通じて地震連帯を続けています。「社会企業連合」が連帯を続ける理由は、最初に述べたように社会的な問題に対する敏感さであり、最大の動機がより持続可能で住みやすい世界を目指しているからです。

私たちの活動内容

地震が発生した直後の数時間以内に、瓦礫から救出された被災者たちの緊急のニーズを満たすために活動を開始しました。これらのニーズには、毛布、セーター、コート、ブーツなどの防寒用品が含まれていました。地震が発生した際、いたるところに雪が積もっており、人々はパジャマのままで外に出ざるを得ませんでした。その後の日々には、食糧と住居の不足が大きな問題となり、全てのボランティアが物質的及び精神的にあらゆるリソースを結集して支援に乗り出しました。

あの日々には、「一滴の水が時には金よりも貴重である」という意識を持って、小さなボトルの水でも手に入れば、すぐに瓦礫の中に持ち込んでいました。今日では、より組織化され、集団的に活動できるようになり、より大きな支援を提供し、地震被災地の遠隔地にも到達できるようになりました。約18か月間にわたり、全部ボランティアたちのものである2つのガレージと2つの工場倉庫を利用し、全ての支援物資をここで仕分けし、地震被災地に送っています。

「社会企業連合」は、地震被災地の緊急ニーズを特定し、問題とニーズに対して即座に解決策を提供することに努めています。初期段階では、コンテナやテントもなく、全員が本当に困窮しており、見える限りの全ての人々が何かしらの支援を必要としていました。私たちが、可能な限り手の届く範囲で全ての人々に支援を提供しました。短期間で、公式機関、大規模な国際組織、民間企業、そして市民団体が協力して、まずはテント村、次にコンテナ村を設立され、そこに送られた被災者たちのほぼ全てのニーズが満たされました。

これら以外に、農業や畜産業を営んでいるため、自分たちの土地や牧草地に近い場所に留まらなければならない山間部の村や高原に住む被災者たち、そして他の全ての被災者が私たちの優先事項となっています。なぜなら、彼らはあらゆる支援や援助から最も遠い場所にいるからです。初期段階では、見つけられる全ての供給者から商品を購入し、地震被災地に運んでいましたが、時間が経つにつれて、被災地でも多くの生産者や供給者が再び活動を再開しました。そのため、現在では経済的な支援も提供するために、被災地での購入を行い、商品を再び被災者に届けています。これらの商品には、緊急のニーズに応じた下着やトラックスーツ、乾燥食品などが含まれます。また、そこで出会った被災者の緊急のニーズや、新鮮さを失いやすい果物や野菜なども含まれます。

「社会企業連合」は、全ての資金を自ら調達し、どの組織にも依存していません。私たちのネットワーク内の全ての活動は、ボランティアの精神に基づいています。地元住民としての迅速かつ効果的な連帯の重要性に関して、次のエピソードは意味深い例となるでしょう。地震発生から最初の週に、カフラマンマラシュで出産を控えた妊婦がいましたが、彼女の担当医が瓦礫の下敷きとなり亡くなってしまいました。このニュースをガズィアンテプで聞いた私たちは、すぐに妊婦をガズィアンテプに移動させ、医師と病院を手配し、彼女は無事に出産しました。その翌朝、女の赤ちゃんが生まれました。

現在進行中のプロジェクトと課題

・衛生

私たちは、ボランティアや寄付者によって提供された家庭や家族が必要とするあらゆる種類の衛生用品を、支援を求める場所に届けています。このニーズは、食料や衣類と同様に継続的な支援が必要です。

・食料

特に仕事を失った家族で始まった栄養不足の問題により、食料の必要性は代替不可能な必需品となっています。残念ながら、地震で失業した人たちは大きな苦勞をしています。これまでに小規模な支援や改善がありましたが、まだ完全に解決されていません。多くの地域から食料の需要があります。初日からボランティアとともに食料を配布しており、この問題に関するあらゆる支援を歓迎しています。

・家具、道具

仮設住宅に移動した家族たちが、AFAD（トルコ緊急災害管理局）から提供された家具や家電を新しい住居に持ち込むことが許可されなかったため、資源に乏しい家族に対して、私たちのボランティアによる組織的な取り組みで家具を提供しました。地震の影響でガズィアンテプに移住した多くの家族に対し、新品または中古の家具を提供して、彼らの問題を支援しました。マラティア県やハタイ県から家族全員を失い、ガズィアンテプに定住している人々のためには、あらゆる種類の家具を集めています。残念ながらこのような状況に置かれている多くの国民がいます。もしもこの2人が家を建てた後で再び同じような地震被災者に出会った場合、このプロセスを繰り返す予定です。

・自転車

現場では、すべてのテントやコンテナハウス町、通りや路地で子供たちや若者たちが自転車に乗っているのを見かけます。自転車は新しい隣人関係が始まる場所での交通手段として役立ち、子供たちや若者たちにとって素晴らしい交流と新しい友人を作る手段であり、また体と心を健康に保つスポーツとしても重要です。みんなガレージや物置には放置されている自転車があるのではないかと思います、これらを共有することができますと考えました。これにより、ゴミになる前に古くなった自転車を再利用し、環境的な社会的利益を生み出しています。メンテナンスや修理が必要な自転車は、協力して修理する予定です。これまでに1117台の自転車を集めて配布しました。引き続き自転車を集めています。トラック1台分集めると地域に送り、必要に応じてこのプロセスを繰り返す予定です。

・図書館

地震被災地域では、教育が最も深刻な課題の一つです。学生たちは真剣に教科書や勉強する場所に困っています。社会的イニシアチブ絆とガズィアンテプ市議会の教育委員会は協力し、地震被災地域に図書館を設立することに決定しました。図書館のコレクションには、幼稚園から大学生まで幅広い年齢層向けの小説、子供向け小説、青少年向けのシリーズ本、クラシックな小説、基本的な作品、教科書が含まれます。この施設は地域の学生たちにとって情報センターや読書、勉強する場所となるよう、地域の自治体と共同で作成されます。この図書館の最適な場所を探している最中であり、また書籍の収集を開始し、継続しています。（など一部省略）

ボランティアの立場からの現状

地震で完全に崩壊したインフラ（電気、水道、ガス）は稼働しており、家を失った市民は集団生活施設に収容され、経済的に余裕のある者は一階建てで比較的安全な家を建てています。道路は修復されていますが、「修復」されていない所もあり、時折これが致命的な交通事故の原因となっています。家を失った所有者（約4000世帯が知られています）のためには、4500戸の住宅建設が進行中です。

公的機関は1250戸の住宅が引き渡されたと発表しましたが、実際に居住可能な住宅に移った住民はこの数字よりもはるかに少ない状況です。住居問題は人々にとって最も重要な問題です。集団生活施設での生活が非常に困難であり（衛生問題に加えて、コンテナは夏は暑く、冬は寒く、洪水にも見舞われます）、また住宅の賃料が過剰に上昇しており、（地震前に1000トルコリラの住宅を7000-8000トルコリラ未満で借りることができません）仮設住宅に移った人々には家財道具の購入義務もあり、新たな危機を応じてきました。

終わりに

地震の傷を癒すことは広範囲にわたり、おそらく数年かかるでしょうが、私たち社会企業連合としては、現場でできる市民のイニシアチブの限界を考慮し、2年間の期間を見積もっています。進行中のプロジェクトを終了させ、将来の必要性に備えて連帯を続けます。私たちの住む地域が深刻な地震地帯であるという認識のもと、この過程で再びこのような災害が起こらないことを願っています。病気の方々には回復を、亡くなった方々には安らかな眠りを、そしてご家族にはお悔やみと忍耐をお祈り申し上げます。

地震後5日目にガズィアンテプに直接来て、電気や水がない時期に私たちをひとりにしなかった日本のCODEと事務局長の吉椿さんと僚友に心からの愛と感謝を送ります。彼らは国や地域の組織ですらまだ整っていない時期に、地震の被災地を注意深く訪れ、観察し、メモを取り、その情報を日本のテレビ局やソーシャルメディアを通じて日本の人々に広め、日本の友人たち（日本人みんな）がトルコに対する支援の必要性を認識する手助けをしてくれました。彼らのこの善行を私たちは死ぬまで子どもたちに語り継ぎます。その素敵なCODEを通じて知り合った若者たち、そして日本の皆さんはいつも私たちの心の特別な場所にあります。皆さんに挨拶と愛を送ります。CODEも日本の人々も自分たちの善行はまだ自分に返ってくるよう、また活動が全部無事に行えるよう、皆さんのために神様にお祈りします。あなたの心にはチュールリップやスマイルが咲きますように。皆さんは私のヒーローであり、私の素敵な日本の友人たちです。

Şih Mehmet DOĞRU

翻訳 ビュルデウルチュン・アジャル・ボライ（東京学芸大学）

一方で、一般的に、公共機関が地震時に生じた混乱を克服し、市民に定期的なサービスを提供していること、銀行がコンテナ支店であってもサービスを提供していること、商店主が店を開いている（建物が無事な者は元の場所で、倒壊した者は政府が設置した市場でサービスを提供しています）と言えます。市民団体や組織された寄付者の関心は低下し、むしろ地元の寄付者が限られた条件下で最善を尽くしています。

最も誇りに思っていることは、地震の2日目にガズィアンテプからの友人たち（みんな）が私たちに連絡したことです。食料品、衛生用品、衣類と共に私たちの援助に駆けつけました。彼らと一緒に持ち込んだ資材を配りました。私たちは地震後、村々や家々を回って地元の人々の体験を聞き、彼らの悩みに共感しました。なぜなら、各家庭で喪失があったし、地獄のような体験をした人々は、その経験を語り、分かち合い、「誰かが自分たちのそばにいる」ということを感じたかったからです。私たちはそれを実現しました。グループとして、私たちは受けたすべての要請に対して無償で応じ、あらゆる面で支援を提供しました。

将来のビジョン

現在の最大の欠点と必要なものは、新しい住宅に移動する人々の家具の必要性、賃貸住宅に住む人々の高額な家賃負担、および一般的に高騰する物価による生活費の高騰です。さらに、修復された道路の適切な修理、交通信号の完成、建設中の仮設住宅の未完成の問題もあります。最後に、多くの建物が損傷状態が明確ではなく、裁判過程が継続しています。このプロセスを迅速に完了させ、リスクのある建物を早期に取り壊すことは、かけがえのない生命の喪失を防ぐでしょう。地震とその後の経過は私たちにあってディストピアです。決して体験したことのない出来事の中にいることは、私たちの現実感覚に深い影響を与えました。恐怖を感じる一方で、愛する人がコンクリートの瓦礫の下にしていると知りながら何もできないこと、政府もこのような災害に準備ができていないことを知ることは、大きなショックと失望をもたらしました。これらすべてに加えて、生存者のニーズが満たされないことは私たちの痛みですが、組織化され、以前にこのような経験がなかったにもかかわらず、救援団体のように行動する必要がありました。良い面は、地震の影響を受けていない地域の人々が熱心に支援を提供しようとする願望とその支援です。上記のすべての支援活動は、都市のボランティア社会イニシアチブ絆と、地震被災地域外に住む個人的な知人の貢献によって実現されました。地震被災地域内でも、家が倒壊し、家族が亡くなっているも、自身が健康である限り、素人の地震被災者と協力して実施されました。私たちは自分の車、家、倉庫、そして人力を使って支援活動を行ってきました。この過程を妨げた唯一のことは、トルコの全国選挙で与党が地震被災地域で第一党になったことにより、多くの寄付者が地域からの支援を引き揚げたことです。これは私たちが忘れられない否定的な出来事の一つです。また、この過程が私たちに与えた最も重要な点は、災害現場や瓦礫に介入できる能力と装備を持つ必要性を理解したことです。



CODE未来基金 NEWS

インターン生の紹介

能登半島地震支援での足湯ボランティアをきっかけに今年度からCODEのインターン生が二名入りました。



岩尾 正貴 神戸学院大学
現代社会学部 社会防災学科 2年生

4月からCODEで学生インターンとして活動させていただいている岩尾です。インターン活動は、能登半島地震での「やさしや足湯隊」からCODEの活動やNGOの活動に興味をもったのがきっかけです。足湯隊のボランティアとして参加するだけではなく、被災地支援の活動をマネジメントすることに興味があったので実際にインターンとして活動させていただくことになりました。現在はCODEの一スタッフとして足湯隊運営の補助をさせていただいております。実際にスタッフがやっている仕事を体験させていただき、ボランティアを引率する難しさというものを感しました。CODEのインターン生として活動する中で感じたことは、人とのつながりの大切さです。NGOは人とのつながりで成り立っているといっても過言ではないくらい多方面の方々と協力し合って様々なプロジェクトが成り立っているということを知りました。インターン活動中になるべく多くの人と関わりを持ち、視野を広げていきたいと思います。よろしくお願いします。



玉地 紘樹 神戸学院大学
現代社会学部 社会防災学科 2年生

4月からCODEで学生インターンとして活動させていただいております。CODEに関わるきっかけとなったのが能登半島地震で始まった「足湯隊」でした。学校の講義で現場の話を聞くより直接自分の目で見る大切さや被災された方の目を見てお話を聞く重要性に気づく事が出来ました。インターン生として活動してい中で様々な方と交流を持つことに気づきました。様々な考え方や経験を聞くのは自分にとって素晴らしい経験となっています。その様なお話を伺っていく内に、自分の考えや経験を話せる人になりたいと思いました。その為に、CODEのインターン生という立場を使い、様々な経験を積んでいきたいと思っています。海外の被災地に行くことも挑戦し、日本とどのような違いがあるのかを感じる。防災の勉強以外にも子守ボランティアなどにも参加をして多角的に物事も見る力をつける事を目標とします。よろしくお願いします！

NGOことはじめを開催しました！



NGOことはじめは、コロナ禍を得て2年ぶりに開催されました。CODEの理事である村井雅清を講師に、「NGOについて・能登半島地震の支援から見てきたNGOのあり方」をテーマに、お話をいただきました。

そもそもNGOとは？というお話から、阪神・淡路大震災から30年を迎えるにあたり、30年の実践を通して改めて見てきたNGOのあり方についてお話をいただきました。最後には参加者同士でディスカッションを行いました。

日時：2024年7月20日(日) 09:30～12:30
場所：CODE海外災害援助市民センター事務所
主催：CODE海外災害援助市民センター
開催：現地開催のみ
参加者：15名

第一部では、阪神・淡路大震災の市民活動をきっかけに日本では多くのNGO・NPOが設立されたことやその歴史、市民とNGO・行政・企業の関係性のあり方についてお話をいただきました。第一部をふまえて第二部では、「1.1～1.17へ」として能登半島の現状から阪神・淡路大震災のボランティア元年について再考するセッションでした。最後のセッションでは話を聞いた若者たちを中心にそれぞれが今能登半島や自分の身の回りの社会について感じていることを共有し、世代間の考え方の変化や共通する課題を振り返りました。



参加者同士のディスカッション



参加学生の感想

神戸学院大学 河野新さん

同世代の若い世代の方や阪神・淡路大震災を経験した世代の方がいて、グループワークなどで意見交流することによって知見が深まった。また、足湯ボランティアで能登に行ったことを思い起こす場にもなり、さらに阪神・淡路大震災の教訓を知る機会にもなって有意義な時間になった。自分は政治的なことに興味がなく自分の意見すら持っていないことが露呈してこれからは自分なりの意見をもって自信をもって発表したいと感じた。

夢野台高校 小篠凌汰さん

今日のNGOことはじめで今までほとんど違いがないと考えていたNPOとNGOの違いをしっかりと理解出来たのと混同するのが何故よくないのかについてしっかりと理解出来たのは大きな成果かなと思います。その後のフリートークでは色んな話が出ましたが特に政治系のお話を同年代にしても思想が強いなあなどと茶化されるし、大人からは野心家だなんだと無駄にもてはやされるという話でかなり盛り上がったのが印象に残ってます。また機会があれば是非参加したいと思います。

能登半島地震報告会

開催概要

日時：2024年5月26日（日）14:00~17:00
場所：兵庫県立大学 神戸防災キャンパス大教室
参加者：約70名(オンラインと対面の両方を含む)
内容：
第一部 被災地NGO協働センターの報告
頼政良太（被災地NGO協働センター 代表）
村井雅清（被災地NGO協働センター 顧問）
第二部 足湯ボランティアの報告
吉椿雅道（CODE海外災害援助市民センター 事務局長）
山村太一（CODE海外災害援助市民センタースタッフ）
4次隊 西井優空(兵庫県立大学)
5次隊 今井愛梨(聖路加国際大学)
6次隊 岩尾正貴(神戸学院大学)
7次隊 増田尚也(静岡県立大学)
8次隊 玉地紘樹(神戸学院大学)
第三部 全体ディスカッション
主催：被災地NGO協働センター
CODE海外災害援助市民センター



5月26日（日）に被災地NGO協働センターとCODE海外災害援助市民センターが能登半島地震の報告会を行い、被災地で今だなお続く課題や今後の復興支援について共有しました。また、若者を中心に2月に結成した足湯ボランティアを行う足湯隊の報告も行いました。ご参加いただいた皆様、活動を応援して下さいました皆様本当にありがとうございました。報告会に参加された方々の感想をご紹介します。（山村）



参加者の声

- ・なぜ足湯が良いのか、それも学生が良いのか理解できました。将来に生きる貴重な体験をされたのだと思います。被災地域とボランティア、高齢者と学生をつなげる共助の素晴らしい取り組みだと思います。もっと広がっていくようになれば良いと思いました
- ・報道だけに頼るのではなく実際に自分の目で見て感じる事が最も大事なことで、それを伝えて活動の場所や人を繋げて広がっていく 自分も相手もブラッシュアップ！ボランティアは楽しみながら活動。伝え方の難しさは永遠のテーマかもしれません。
- ・私は災害ボランティアに興味があったのですが自分で調べたりしていなかったのが、今回の報告会で能登の現状を知ることができて良かったです。実際には行っていないけど、足湯隊としての参加報告を聞いて話を聞くだけでも被災者の心の支えになれるかもしれないということを感じられました。被災者は保健師などの専門家よりも私たちのようなただの大学生に話してくれることもあると知り、私でも役に立つことができるなら行ってみたくと思いました。
- ・学生の「経験したからこそ伝えられる。経験したからこそ先の災害に備えられる。」の言葉は胸に響きました。現地のお手伝いもありますが、帰ってきて伝えることや、先の災害への備えに生かすことも大事な働きだと再認識しました。そのことを伝えていきたいです。ありがとうございました。
- ・3時間とは思えないほどあっという間でした。私自身、能登で活動しているので被災者さん一人ひとりの状況は詳しく知っていましたが、全体像を把握していませんでした。今全体でどうなっているのか、どのくらい復興が進行しているのかを知ることが出来て良かったです。

スタッフ活動記録（2024/4/1~6/30）	
2024/4/1	PHD協会田村さん、井上さん来所（吉椿）
4/1-3	能登半島地震スタッフ派遣（山村）
4/8	神戸学院大学生（岩尾さん、玉地さん）来所（山村、吉椿）
4/10	トルコ・シリア地震PJミーティング（Serbayさん、Merveさん、北さん、村井理事、島村さん、山村、吉椿）
4/11	ウクライナ避難民家族の映画撮影に同行（吉椿）
4/12	CODE LETTER オルガさんインタビュー（島村さん）
4/18	子守ボランティア 説明会&交流会（近藤さん、岩尾さん、小向さん、島村さん）
4/19-21	能登半島地震スタッフ派遣（吉椿）
4/20-22	能登半島地震スタッフ派遣（山村）
4/20	中島町ネットワーク ミーティング（増島さん、島村さん、吉椿、山村）
4/22	親和大学国際ボランティア論で講義（吉椿） 第7次足湯ボランティア隊事前打ち合わせ（山村） 石川県能登半島地震に学ぶ 防災フォーラムの事前打ち合わせ（山村）
4/23	第8次足湯ボランティア隊事前打ち合わせ（山村）
4/24	石川県能登半島地震に学ぶ防災フォーラム（おいしい防災塾）（玉地さん、岩尾さん、山村）
4/25	CODE4月度理事会
4/26-29	第7次足湯隊（学生など4名）に同行（南さん、山村）
4/26	コングラント「やさしや足湯隊」クラウドファンディング開始
4/27	能登半島地震募金活動（神戸駅）（島村さん、岩尾さん）
4/29-5/6	能登半島地震スタッフ派遣（島村さん）
4/30	ウクライナ避難民の相談（Liliaさん、吉椿）
5/2	四川大地震16年の共同通信の取材（吉椿）
5/3-6	第8次足湯隊（学生など7名）に同行（島村さん、南さん、玉地さん、岩尾さん、吉椿）
5/11	関西NGO協議会総会に出席（山村）
5/17	MBSラジオ「ネットワーク1.17」に出演（南さん、山村）
5/18	FMわいわい「街ブラ〜人と街とくらしを探る」に出演(山村)
5/21	第10次足湯ボランティア隊事前ミーティング（南さん、玉地さん、山村）
5/22	第9次足湯ボランティア隊事前ミーティング（南さん、島村さん、山村）
5/24	FM茨木放送で「トルコ・シリア地震」の報告（吉椿） トルコ地震プロジェクトミーティング（Serbayさん、Merveさん、北茂紀さん、村井理事、島村さん、山村、吉椿）
5/26	能登半島地震報告会を開催（被災地NGO協働センターと共催、頼政さん、村井理事、島村さん、南さん、岩尾さん、玉地さん、山村、吉椿）
5/29	兵庫県立大学商科キャンパス「災害支援とボランティア」で講義（山村）
5/30	中国人民大学・中国災害防御協会の専門家と意見交換（室崎代表、吉椿）
5/31	大阪大学人間科学部「共生社会論特講1、能登半島地震」で講義（宮本副代表、島村さん、吉椿） 関西大学社会学部生の能登半島地震のヒアリング（吉椿）
5/31-6/2	第9次足湯隊（学生など8名）に同行（村井理事、南さん、島村さん、山村）
6/1	居住福祉学会「能登半島地震報告」に参加（室崎代表、吉椿）
6/3	子守りボランティア定期ミーティング（西受さん、近藤さん、施さん、樋上さん、島村さん、南さん、山村）
6/6	近畿ろうきん寄付金贈呈式に出席（島村さん、吉椿）
6/7-9	第10次足湯隊（学生など11名）に同行（岩尾さん、玉地さん、南さん）
6/7	日経新聞取材（吉椿）
6/10	コングラントとのミーティング（南さん、島村さん、山村）
6/14	ひょうご安全の日推進県民会議総会に出席（山村）
6/16	CODE6月度理事会、2024年度総会の開催
6/17	親和大学「国際ボランティア論」第11回「異文化理解と援助」で講義（吉椿）
6/19	第11次足湯ボランティア隊事前ミーティング（南さん、島村さん、山村、吉椿）
6/20	NPO法人チュラキューブ取材（吉椿）
6/21-23	第11次足湯隊（学生など11名）に同行（島村さん、南さん、山村、吉椿）
6/24	親和大学「国際ボランティア論」第12回「NGOとは」で講義（吉椿） コングラントとのミーティング（南さん、島村さん、山村）
6/25	公益財団法人兵庫県国際交流協会の河知さんにインタビュー（山本さん、島村さん、山村）
6/28	能登半島地震募金活動（神戸駅）（島村さん、南さん、山村）
6/29	能登半島地震募金活動（神戸駅）（上間さん、南さん、山村、吉椿） 中島町ネットワーク ミーティング（島村さん）
6/30	コングラント「やさしや足湯隊」クラウドファンディング終了

※その他、毎週火曜日、神戸学院大学「ボランティア論Ⅱ」で講義、週に二回、ウクライナ避難民支援の子守りボランティアを実施。



4月1日から6月30日
＊NL掲載不要者 削除済み

【会費】
草地とし子、芹田健太郎、多言語センターFACIL、橋口文博、飛田雄一、宮本匠、山崎達枝、近藤悦生、柴田康彦、旦保立子、原田悦子、小西美子、井上歌緑、宇都幸子、橋本京子、渡辺知佐子、伊東伸子、小田尚子、黒瀬晴世、高橋智子、稲垣信一、谷川瑞穂、長澤雄二郎、竹代一洋、山崎清、越山健治、岡田雅幸、安富信、島本久嗣、木下洋子、河知秀晃、湊崎康雄、不破雅実、竹尾裕子、永松由美、北後明彦、安藤尚一、石井知代、カトウチエ、稲見光則、鵜飼愛子、小竹貴介、石田和子、川中大輔、三輪行信、飯田浩、上田耕蔵、遠周龍子、饗庭千代子、鎌倉千俊、津久井進、山崎水紀夫、永松伸吾、田中一正、武田節子、長澤雄二郎、片岡幸壱、久保幸雄、正宗賀代、津田秀子、岩尾興一、河崎紀子、釜谷幸江、山田千恵子、小林アイ子、

【ご寄付】
▶個人
ア行
飯田浩、市川直美、伊藤幸子、井上雅楽緑、今中由美子、市原キヨ子、岩永美英、鵜飼愛子、宇都幸子、梅村新、上柳幸子、大湊幹朗、岡田雅幸、岡部徹、小川雅子、

カ行
河崎紀子、木下美根子、木村周平、木村卓美、木村理恵、黒瀬晴世、五嶋和子、小林アイ子、近藤悦生、

サ行
佐藤和子、佐野禎夫、柴田康彦、志岐悟、

タ行
高井喜久治、高野美智代、高橋精巧、高橋智子、高原幸輔、武内句子、竹内千鶴、谷川瑞穂、田波光子、旦保立子、津久井進、土居峻、戸上和美、

ナ行
永松伸吾、長澤雄二郎、中原喜代子、中川章子

ハ行
服部隆志、花田知佳、羽島新菜、飛田雄一、日向真紀子、藤本憲児、福田道子、藤田雅子、本岡秀子、

マ行
前田雄一、正宗賀代、マツダヨウコ、三原翠、三前直美、宮崎洋介、室崎益輝、

ヤ行、ワ行
山内正子、山田綾子、山田千恵子、山風呂公子、山本敬子、山本正紀、吉椿琴、米田幸人、米谷啓和、渡辺知佐子

▶団体
アースデイ神戸実行委員会、まちづくり工房井筒屋、コープこうべ、神戸市立葺合高等学校、神戸YMCA、兵庫県立舞子高等学校、
1.17希望の架け橋、

【能登半島地震救援 募金】
能登半島地震救援活動への募金はCODEが共に活動している被災地NGO協働センターにおける救援活動に充てさせていただきます。直接、被災地NGO協働センターに振り込んでいただいた方は、協働センターから領収書を送らせていただきます。

その他、街頭募金活動等でも多くの方々からご協力頂いています。
ご支援・ご協力誠にありがとうございます！



目標達成

若者による足湯ボランティア「やさしや足湯隊」のクラウドファンディングが達成しました！！

目標額 200万円

期間 4.26 - 6.30

能登半島地震

支援総額

2,178,000円

108%

目標金額 2,000,000円

ネクストゴール 3,000,000円

サポーター 272人

終了しました

募集終了

能登半島地震支援「やさしや足湯隊」のクラウドファンディング、目標額の200万円達成しました。一時期は、もう達成できないのでないかと思いましたが、みなさんのお力添えいただいたおかげで272人の方にご支援いただき2,178,000円にもなりました。

賛同して支援していただいた方、SNS等を駆使して拡散していただいた方、みなさん一人ひとりの力、できることがつながったから達成できたのだと感じております。誠にありがとうございました。

貴重な浄財は、若者たちね足湯ボランティア活動に使わせていただきます。

古くからご支援いただいている方、初めてご協力いただいた方、お一人で何度もご寄付いただいた方、匿名の方など、一人ひとりが若者を応援したい、皆で達成しようという想いを感じました。

「やさしや足湯隊」は、そのようなみなさんの想いをしっかり受け止めて今後も活動していきます。

また、活動報告はコングラントのHPやInstagram、Facebookでも発信してまいりますので、ご覧ください。

今後ともよろしくお願いいたします(山村)

詳細情報はコチラ！

<https://congrant.com/project/ngokobe/10525>

正会員・賛助会員各位

CODE海外災害援助市民センター
代表理事 室崎 益輝

2024年度年会費納入のお願い

平素より当団体の活動にご理解とご協力を賜りありがとうございます。
2024年度の会費納入について、下記ご案内のとおりお振込みくださいますようお願い申し上げます。
すでにお振り込みいただいた方は、行き違いをご容赦ください。
出費多い折かと存じますが、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

記

会 費：正会員（個人） 5,000円×1口以上
賛助会員（個人） 2,000円×1口以上
納入方法：同封の振込用紙、もしくは下記口座への振込にて納入ください
ゆうちょ銀行
支店番号：〇九九店
店番：099
口座番号：0330579（当座）
口座名義：CODE（コード）
※口座名義をカタカナで指定されている場合は「コード」とご記入ください。
※通信欄に「正会員費」「賛助会員費」とご記入ください。

以 上

会員・寄付者各位

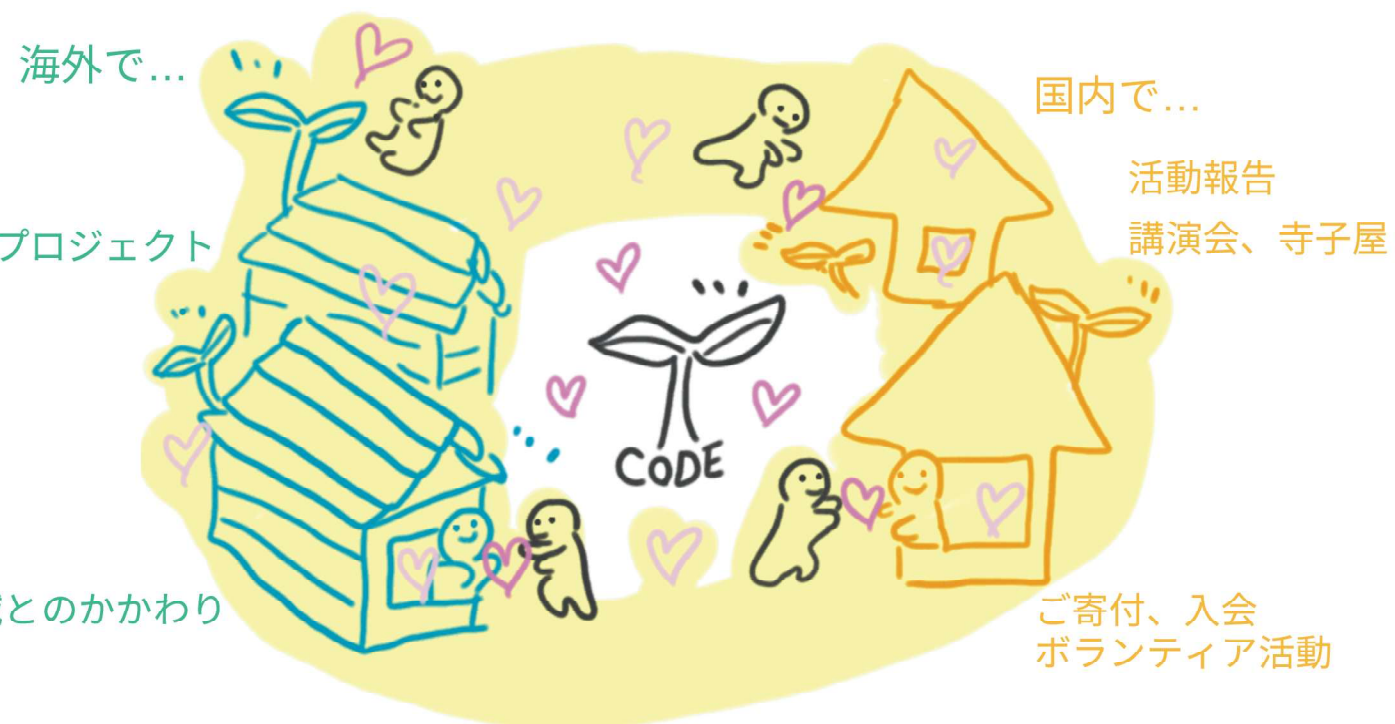
領収書送付の廃止について

平素より当団体の活動にご理解、ご協力をいただきありがとうございます。
原点である阪神・淡路大震災から30年を迎えようとしています。
この度、ご寄付いただいた方へお送りしていた領収書に関して、複数の会員、寄付者の方々から、「現在の領収書は領収書は郵便代や紙などにはもったいない」、「メールなどで送ってくれた方が余計な費用がかからない」、「貴重な寄付を郵便代に使わないでほしい」などのお声をいただいております。よって、今後は領収書はメールなどに添付するデジタル化をしていきたいと思っております。もちろん、これまで通りハガキの領収書をご希望の方は郵送させていただきます。何卒ご理解のほどよろしくお願いいたします。
今後も、支援の必要なところに皆様の想いを届けてまいります。引き続きご支援、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

CODE海外災害援助市民センター

ご協力をお願い

みなさまからの応援があって、CODEは活動を継続できます。
お家から世界へ。CODEが支援のお気持ちを届けて、世界とあなたをつなぎます。



寄付して応援

活動を継続するためのご寄付です。
全体運営、特定の救援プロジェクトへのご寄付の指定も可能です。
25%を上限に管理運営費とさせていただきます。

ボランティアとして応援

事務所での作業や翻訳、自宅でも可能な作業などの
ボランティアを募集しています。
詳しくはCODE事務局までお問い合わせください！

知って・学んで応援

あなたの住んでいる地域で開催される講演会に
CODEスタッフを講師として派遣します。
テーマ・内容等、お気軽に事務局までご相談ください！

サポート会員になって応援

【正会員（総会での議決権あり）】

個人・学生 : 年会費 5,000円×1口以上
NPO/NGO : 年会費 5,000円×1口以上
企業・団体 : 年会費30,000円×1口以上

【賛助会員】

個人・学生 : 年会費 2,000円×1口以上
NPO/NGO : 年会費 2,000円×1口以上
企業・団体 : 年会費10,000円×1口以上

ともにCODEを創ってくださる方を
いつも募集しています

お振込み方法

■ ゆうちょ銀行
支店名：〇九九（ゼロキュウキュウ）
支店番号：099
口座番号：0330579
■ 近畿労働金庫
支店名：神戸支店
支店番号：642
口座番号：8881040（普通）
口座名義：CODE海外災害援助市民センター

【郵便振替】

加入者名：CODE
口座記号番号：00930-0-330579

【クレジットカード】

CODEのホームページより
<https://code-jp.org/donation/>
※通信欄に用途をご明記ください。(例「ウクライナ」「賛助会員」)



発行元 (特活) CODE海外災害援助市民センター

〒652-0801 兵庫県神戸市兵庫区中道通2-1-10

TEL: 078-578-7744 FAX: 078-574-0702

E-mail: info@code-jp.org

HP: <https://www.code-jp.org/>



Facebook



Instagram